

二〇一八年二月 米子工業高等専門学校研究報告 第五三号 抜刷

影印・翻刻 嘉永六年十一月十日鹿島家歌合

渡邊 健

米子高専古文書の会

影印・翻刻 嘉永六年十一月十日鹿島家歌合

***渡邊 健 ***米子高専古文書の会

概要

ここでは、鹿島家（鹿島本家、米子市立町）旧蔵で、現在は山陰歴史館が所蔵する「歌合」（本稿では、「嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」と称する）の影印・翻刻に解題を付して紹介する。これは、「米子高専古文書の会」の平成二十八・九年度の活動成果の一つであり、資料の撮影と解題の執筆は渡邊が行ったが、資料の解読は「古文書の会」が共同で行った成果である。本歌合は、幕末に鹿島家を中心として米子で盛んになった和歌文化の一端を伝えるものであるが、その本文の全体がこれまで紹介されたことはない。今回の影印・翻刻により、幕末期の地方歌壇の活動をうかがい知ることのできる好資料の本文が提供されたことの意義は少なくないと思われる。解題には、本歌合の書誌データと、成立・作者・判者に関する簡単な解説を施した。

「嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」解題

一、底本について

本書の底本には、鹿島家旧蔵、現山陰歴史館蔵「歌合」（整理番号C1M G 0222）を用いた。他の伝本は存しない。近年、原豊二氏が調査・紹介された鹿島家歌資料の一つである。^{〔注1〕} 本書は、表紙に「歌合」とあるのみであるが、本文の最後に「十一月十日午はかり」とあり、後述する理由により嘉永六年（一八五三）のものと思われるので、「嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」と呼ぶことにする。

本書は袋綴（紙縫綴）一冊の写本で、縦二九・八糎×横二一・一糎、大本よりやや大きな書型である。表紙は本文と同じ楮紙で題簽はなく、中央に本文と同筆で「歌合」と直書されている。本文九丁、遊紙はなく、第一丁から墨付となる。本文は鹿島長行の筆と認められ、一面八〜十行書き。和歌一首一行書で、一面に歌合を一番ずつ、左右の歌、作者、勝負付、判詞が記される。歌合は十五番三十首で、その後に「えりうた」として、この歌合から秀歌七首を選んで作者名と共に記す。その七首目は歌の右肩に「卷

頭」と書かれており、この歌合の最も優れた歌として、十二番右で勝となった長行の「遠村鶏」題の歌が選ばれている。本文の末尾に「十一月十日午はかり 古蔭」とあるのは、幕末の因幡の国学者・歌人の小谷古蔭で、勝負付・判詞・選り歌の部分は古蔭の筆と認められる。

本書の保存状態は決してよくはなく、汚れや虫損等もあり、やや文字が判読しにくい箇所もある。

二、成立

本書の成立を考える上で手がかりとなるのが、鹿島家旧蔵（現山陰歴史館蔵）の『無題歌合集』である。これも、本書と同じく、原豊二氏によって紹介された資料の一つで^{〔注2〕}、嘉永六年（一八五三）十月から安政二年（一八五五）正月までに鹿島家で行われた歌会・歌合二十種ほどを集めた歌書である。その中に、「霜月二日略会 日孝」として収められる嘉永六年中の歌会が、本書とほぼ重なる二十九首の歌を有する。

以下、その本文を掲出する。（比較のため、「歌会」の歌番号は丸数字で示し、歌の下に「歌合」での歌番号を算用数字で記した。）

霜月二日略会 日孝

兼題 埋火

- ① みる夢は春にかよひて冬の夜の長きもしらぬ埋火の本(2) 兼烈
- ② 冬こもりかたらふこともこん春の思ひおこせる埋火の本(1) 日孝
- ③ おもはずも夢と成けり埋火をいく度となくかき起す間に(3) 重固
- ④ 更行は閨の埋火かき絶て渡るも寒き夢の浮はし(4) 豊正
- ⑤ 空たきの梅かゝかをる埋火にねふりし猫の夢やいかなる(5) 常之
- ⑥ かひなれし手さへ放れて唐猫の夜たゝねふれる埋火の本(6) 重好
- ⑦ さへまさる夜半にも有か埋火のかしらの雪ははらひ尽せと(7) 建比古
- ⑧ 空たきにしはしは春のこゝちしてゆめ長閑なる埋火の本(8) 常之
- ⑨ かたるへき友ならねとも埋火は寒き心のためみ成けり(9) 兼利
- ⑩ 霜さゆるねやのやつれの有明にとはれて寒き埋火の本(10) 重好
- ⑪ 雪ふれは籬もあれて白菊の俤にほふ埋火のもと(11) 日孝
- ⑫ 松風の音に心をすます哉おいの友なる埋火のもと(12) 兼烈
- ⑬ ひとり守閨の埋火小夜更ておく霜白くなるそ寒けき(13) 長行

冬田

- ⑭ 鳴子には驚かされぬ小山田のおち穂になるゝむら雀哉(15) 建比古
- ⑮ 夕日影つたふ鳴子の繩朽ておとせぬ冬は淋しかりけり(16) 重好
- ⑯ 小山田に今は鳴子のかけもなしあさる鳥の声しけくして(17) 兼烈
- ⑰ 刈残す稲はにくれて家鴨のあさる門田は霜かれにけり(18) 常之
- ⑱ 水かれし田の面にあさる鳥さへおのかさまく見ゆる冬かな(19) 兼利
- ⑲ 朝なく霜置そひて小山田の庵もしとろに成にけるかな(20) 日孝
- ⑳ 刈残す山田の稲葉風見えて影さへ渡る冬の夜の月(21) 長行
- ㉑ かり残す山田のかゝし老ぬれはもるにかひなき雪の朝空(22) 豊正
- ㉒ 遠村鶏
ほととふきこの野の末の鳥か音も風によせ来る朝朗哉(23) 兼利
- ㉓ 山かけの松原こしに里見えて鶏か音遠き朝ほらけかな(24) 長行
- ㉔ 遠くとも聞もまかはぬ鶏か音に此里までやあけむとすらむ(25) 建比古
- ㉕ はるけくてたつる朝けの影もなし聞鶏か音やいつこなるらん(26) 兼烈
- ㉖ 月影は小まつかうれにかくろひて鶏か音高き遠方の里(27) 常之
- ㉗ 遠方やしみ立杉のひまもれて里は床しき鶏のこへかな(28) 日孝

⑳ 朝けたつ遠の一村ほの見えて明んと告るくたかけのこへ (29)

豊正

㉑ 夜こもりにうたふやいつら庭つとり声のみもるゝ松の一むら (30)

重好

「歌会」と「歌合」とを比較してみると、

・「歌会」の①兼烈・②日孝の歌が、「歌合」では1日孝・2兼烈となり、順序が入れ替わっている。

・「歌合」の七番右にある重好の歌「老ぬれは心も細く成にけり身を埋火の有と斗に」が、「歌会」にはない。

・この二点を除けば、「歌会」と「歌合」とは歌の順序が一致しており、本文もほぼ同一である。

といったことが明らかになる。これらのことを考え合わせるならば、この歌合はもともと、嘉永六年十一月二日に歌会として行われたものが、後日、歌合に仕立て直され、小谷古蔭の加判を得て十一月十日に成ったものとみられる。歌会の歌の順番はそのままに、機械的に左右に番えていき、「埋火」題十三首を一七番、「冬田」題八首を八十一番、「遠村鶏」題八首を十二番十五番として番えていく際に、「埋火」題だけは奇数であったので、新たに重好の歌を一首加え、十五番三十首の歌合としたものと推測される。ただし、ここでこのように考えた場合に問題となるのは、先に成立したはずの「歌会」の㉒長行の歌が、

山かけの松原こしに里見えて鶏か音遠き朝ほらけかな

となつてのことである。この歌は、「歌合」十二番右では、

山影の梢はるかに里見えて鳥も鳴なる朝朗哉

となつていた。「歌合」の判者・小谷古蔭はこの歌を勝とし、判詞に「二の句『松原こしに』四の句『鳥かね遠き』とすべし」と歌句の訂正を指示していたが、「歌合」で添削した後の形の本文が、「歌会」の本文となつていくことになる。

これに対する明確な解答は今持ち合わせていないが、『無題歌合集』での

この「歌会」の本文を見ても、長行の歌に訂正した跡などは見られない。

一方、古蔭は「歌合」で二番左、三番左、四番右、七番右、八番左、十三番右、十四番左・右、十五番左でも歌句の訂正を指示しているが、それらは「歌会」ではいずれも、もとの本文の形のままとなっている。『無題歌合集』に集成された二十種ほどの歌会・歌合を書写しているのが長行であることを考えるならば、おそらく、長行が『無題歌合集』にこの「歌会」を記録したのは、「歌合」よりも後だったのだろう。その際、他の歌人の詠歌については、「歌会」の時と同じ形の本文を記したものの、自分の「山かけ」の歌については、これが判者の古蔭によって「巻頭」として「歌合」中の最上の秀歌とされたことを名譽に感じ、敢えて古蔭が添削した形に直して「歌会」に記録したのではないだろうか。

ともあれ、『無題歌合集』によって、本書の成立年次が判明し、本来歌会であったものが歌合に仕立て直されたという事情が知られるのは興味がい。

三、作者・判者について

作者は九人で、歌合の登場順で挙げると、日孝・兼烈・重固・豊正・常之・重好・建比古・兼利・長行。作者に関する詳しい考察は後考に委ねたいが、米子在住の商人・医師・僧・神職ら町人階級の歌人たちが参加している。幕末頃、鹿島家が中心となり和歌を愛好する者たちが集った米子歌壇の活動の様子がよく知られる。右の歌人たちはいずれも、当時鹿島家で行われた歌会・歌合の常連のメンバーであり、彼らの中には『類題鯁玉集』『類題和歌鴨川集』など、当時盛行した類題和歌集にしばしばその名が見える者もいる。彼らが小規模で同志的結合の性格の強い歌壇で和歌の才を磨き、全国的な類題集に応募していた様相がうかがわれる。

右の歌人のうち、長行は鹿島本家の九代目であり、当時鹿島家で行われた歌会・歌合のほぼ全てに参加していることから、その主催者的な立場にあったことが考えられる。長行は、嘉永六年当時は二十一、二歳であったと思われるが、和歌に非常に熱心であり、自ら詠歌に励むとともに、この

時期の鹿島家の歌会・歌合を『無題歌合集』に整理・記録し、『類題和歌鴨川集』『類題採風集』といった類題集にも積極的に投稿していた。この歌合を書写しているのも長行であり、二、で述べた「歌会」から「歌合」への編み直しも彼の所為であろうと思われる。

判者の小谷古蔭は、因幡国の国学者・歌人で、文政四年(一八二二)〜明治一五年(一八八二)、六十二歳。粟谷天王神社の家に生まれ、早くより国学と和歌を志し、紀州に游学して加納諸平の下で学んだ。その歌才を諸平に高く評価され、『類題鮎玉集』の編集にも助力して数年後に帰国するが、柿園派の歌人として声望を集めた。古蔭が嘉永六年十月から翌七年正月頃にかけて米子に滞在し、鹿島家で行われた歌合でしばしば判者となっていたのも、指導者としての役割を期待されたからであろう。

判詞は概して簡潔だが、率直な批評態度で表現上の難点を指摘したり、歌句の訂正を指示したりしている。古蔭には家集『六杉園集』があるが、歌論としてまとまった著作はないため、この歌合の判詞は古蔭の和歌観をうがわせる貴重な資料といえることができる。

最後に、影印では分かりにくい底本に見られる訂正・補入について記しておく。

- 九番右の歌 第二句「稲葉くたれて」
↓「かく」を消して「くた」に訂正
- 十二番右の歌 第三句「里見えて」
↓「へ」を消して「え」に訂正
- 十三番左の歌 第五句「明とすらん」
↓「明」の右下に「ん」を補入
- 十三番右の歌 第二句「朝のかけも」
↓「朝」の右下に「け」を補入

注

- (1) 原豊二氏「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」(『山陰研究』第三号、平成二二年一月)。
- (2) 『無題歌合集』(整理番号C1MG 0233、0232)は、鹿島長行の筆に成る袋綴一冊の写本。注1原豊二氏の論稿に詳しい紹介がある。この書は外題を欠き書名が明らかでないが、ここでは原氏の呼称に従って『無題歌合集』と呼ぶことにする。

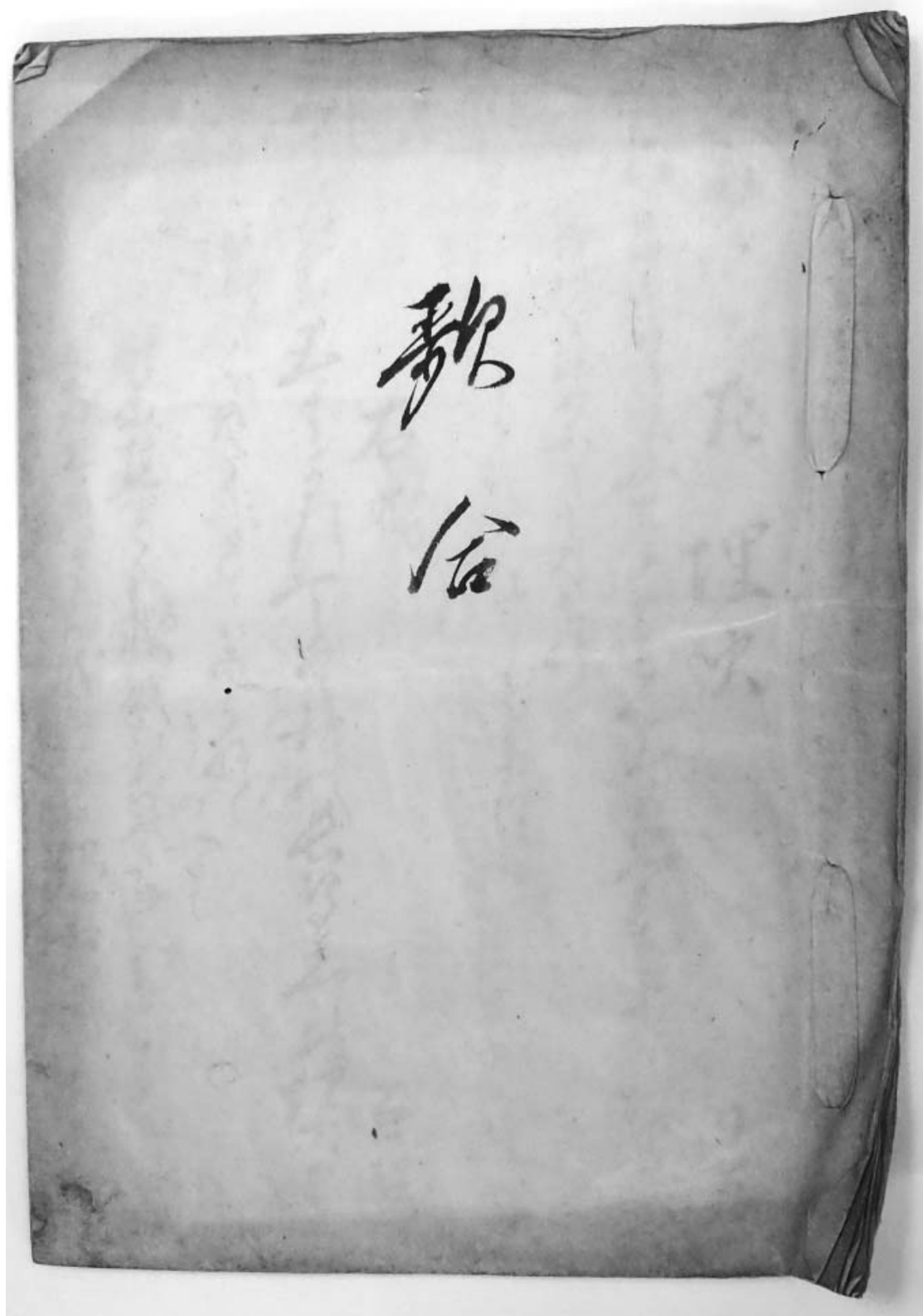
* 原稿受理 平成二十九年十二月八日

※ 教養教育科

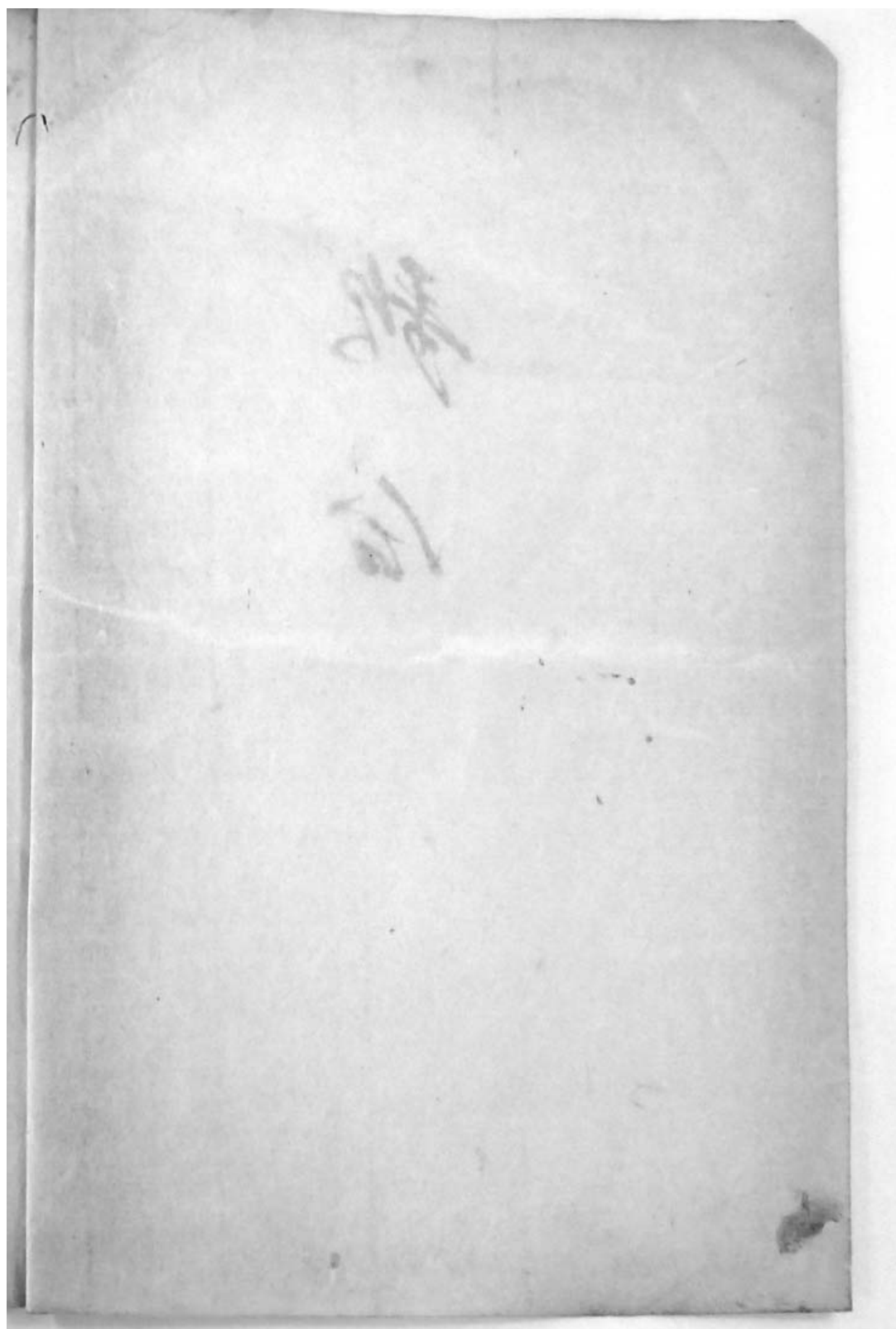
※※ 米子高専古文書の会 参加者

(平成二十八〜二十九年度、五十音順)

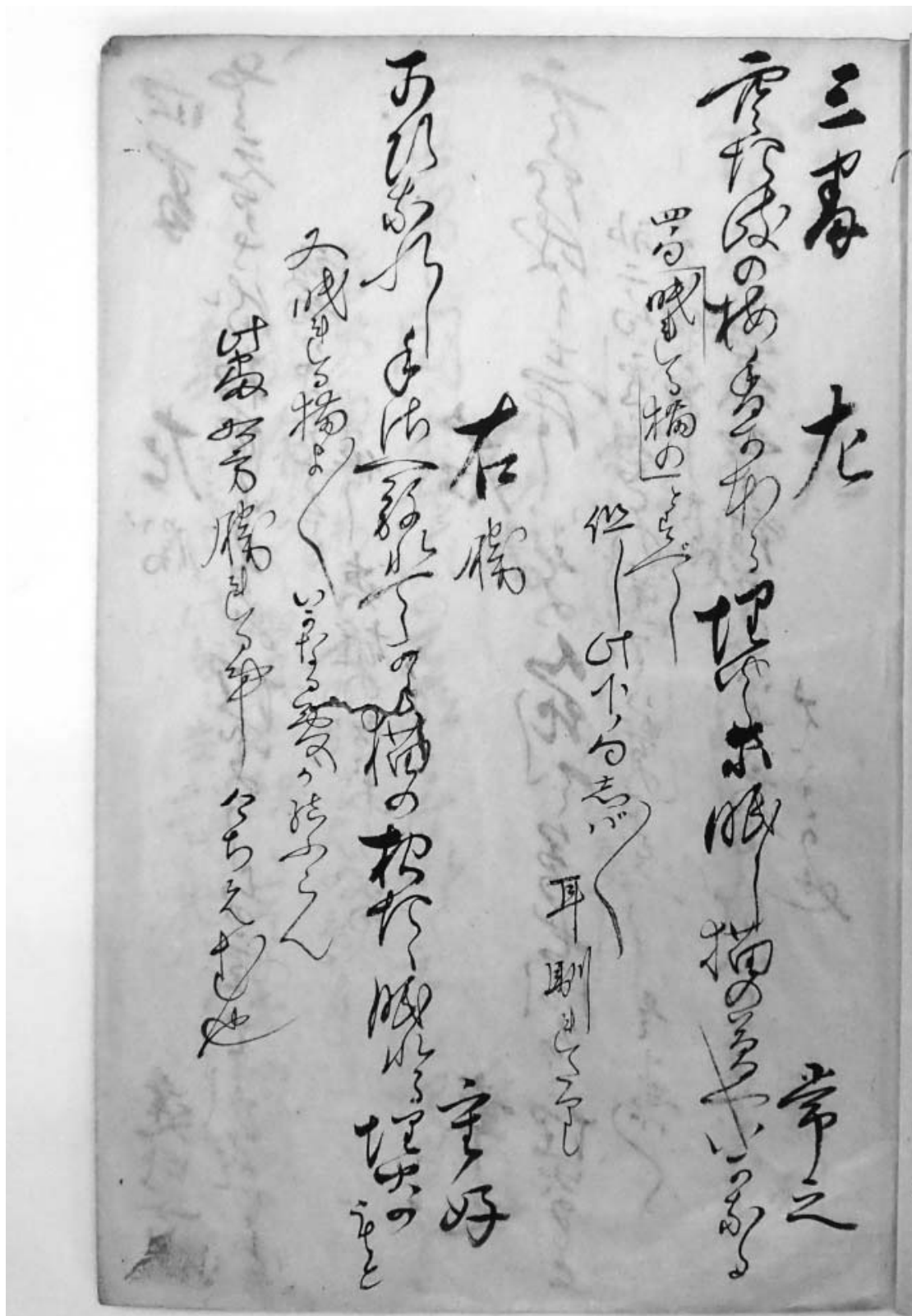
- 坂田友広 (米子高専名誉教授)
- 辻本桜介 (米子高専助教)
- 東條英樹 (古文書愛好家)
- 中宏 (NHK学園古文書講師)
- 永井猛 (米子高専名誉教授)
- 中原道宣 (米子高専非常勤講師)
- 羽田成夫 (元米子市小学校教員)
- 松崎安子 (元米子高専准教授/現国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員)
- 山藤良治 (元米子高専教授)
- 和田嘉宥 (米子高専名誉教授)
- 渡邊健 (米子高専准教授)

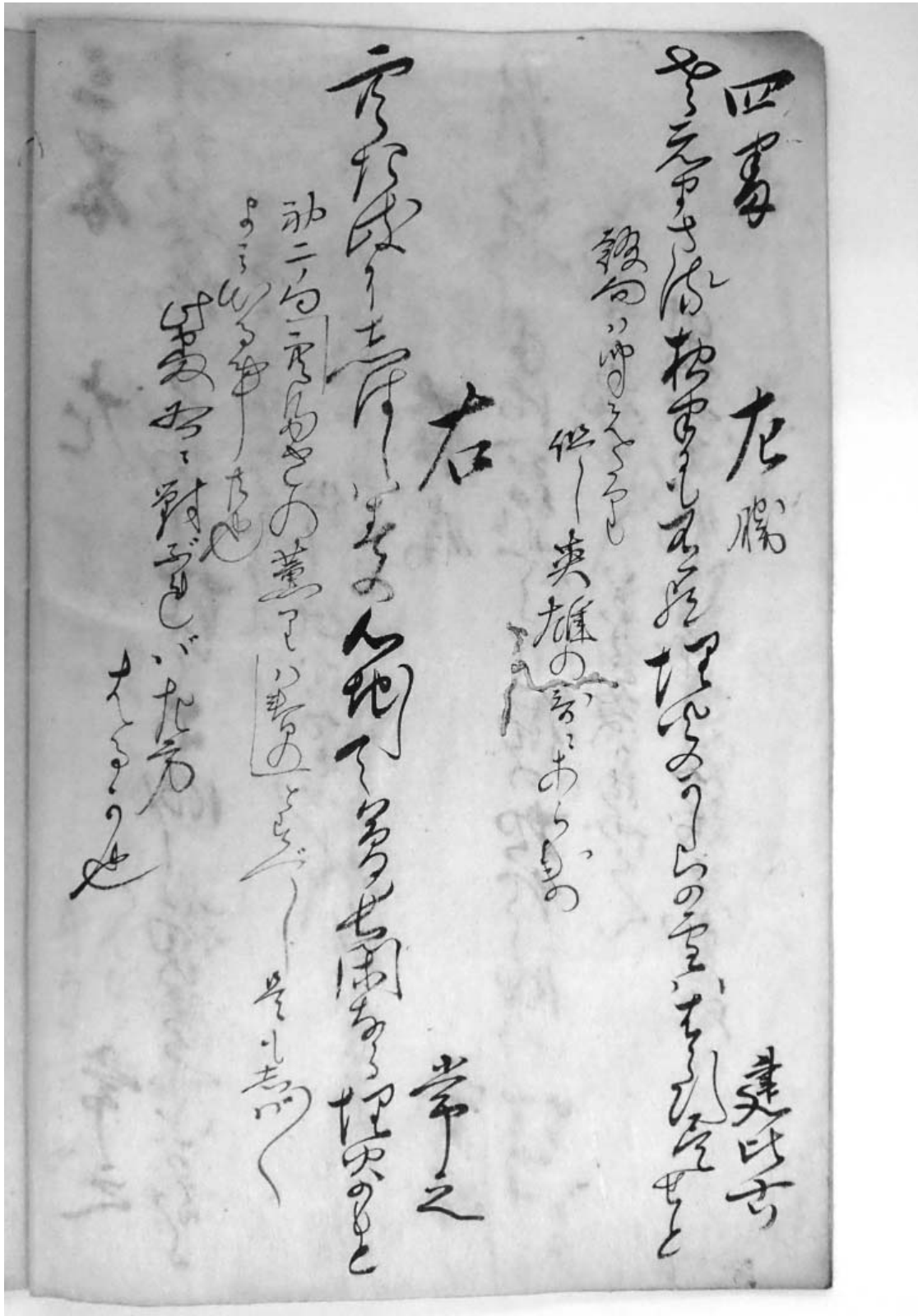


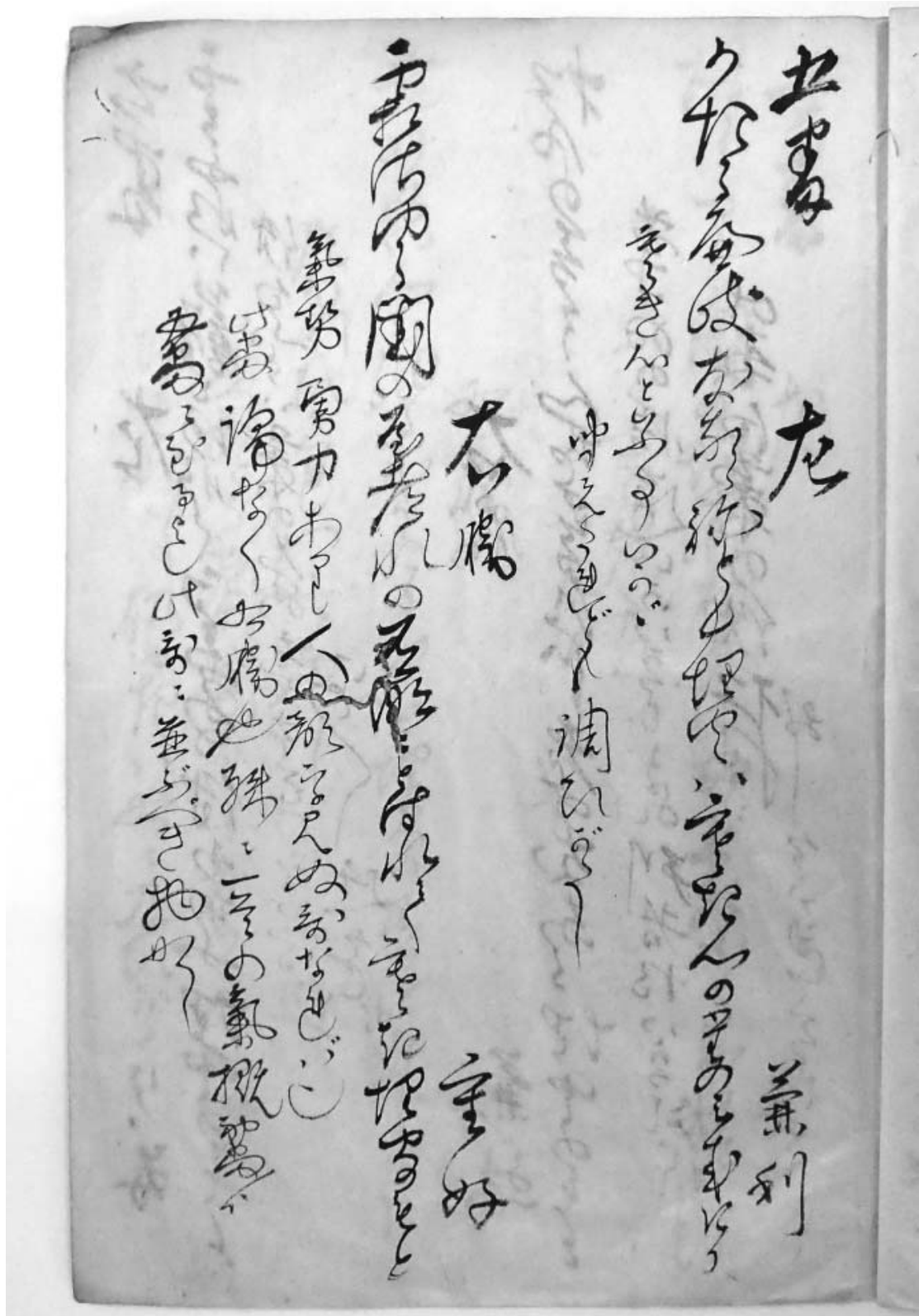
表紙



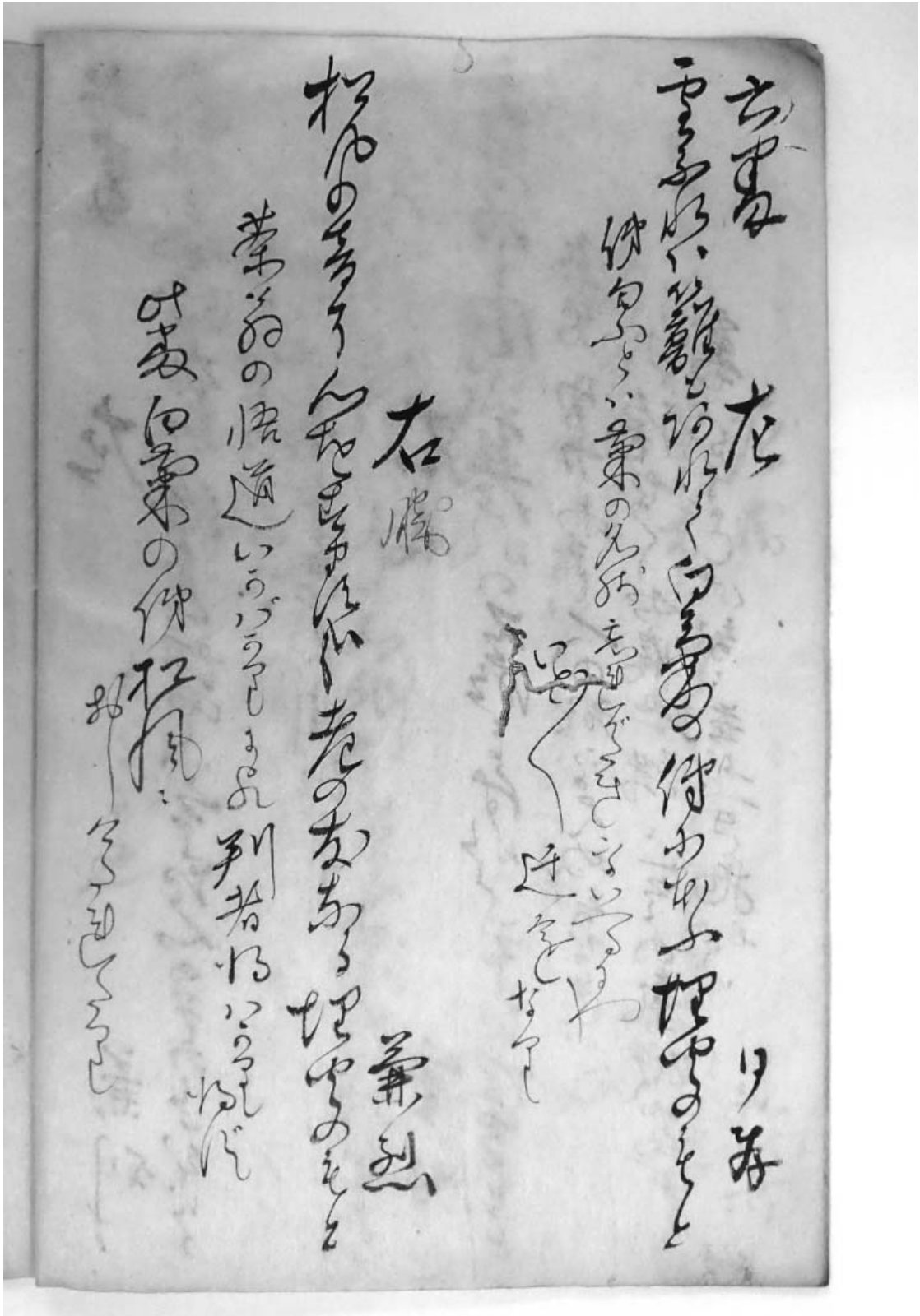
表紙裏

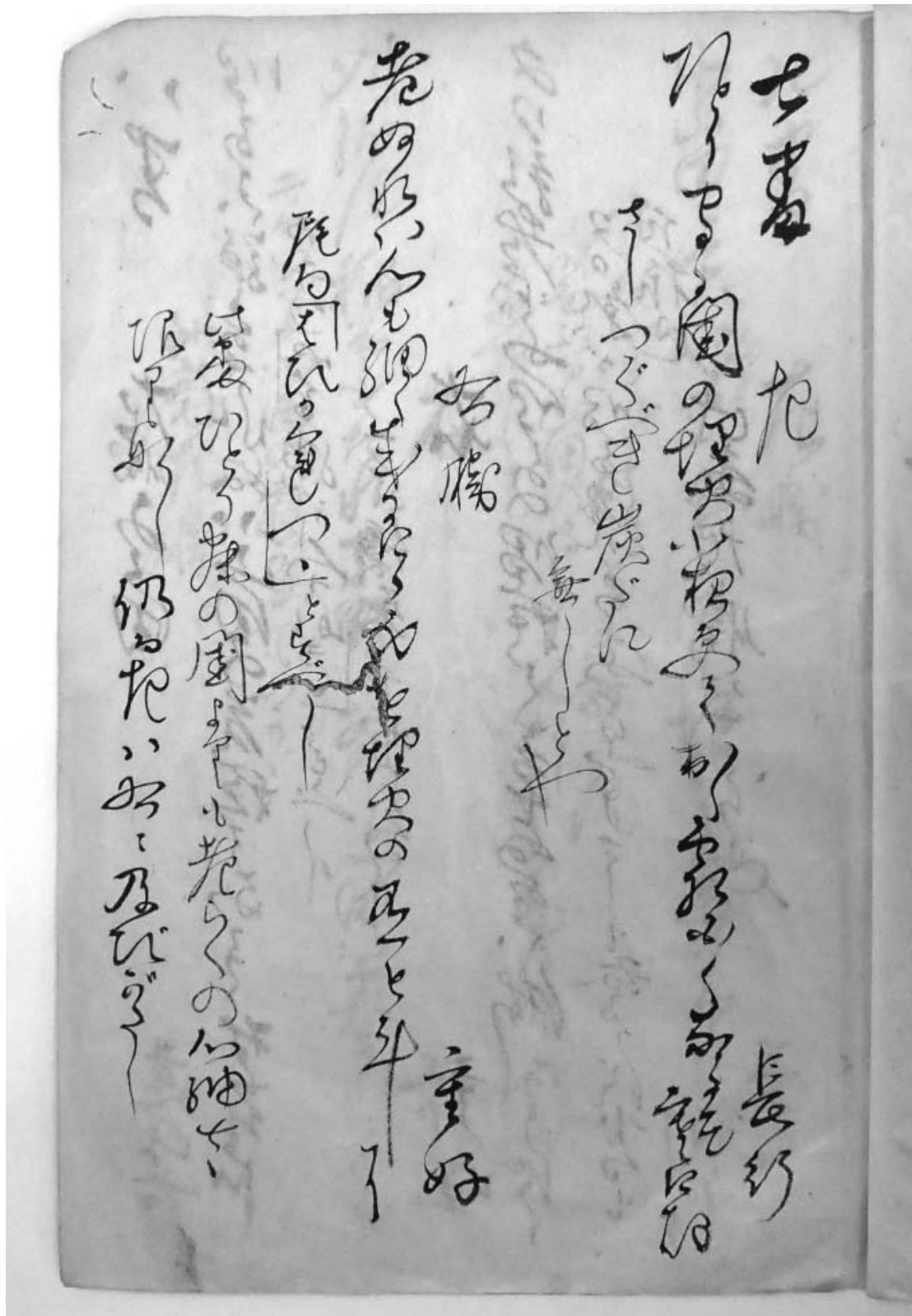




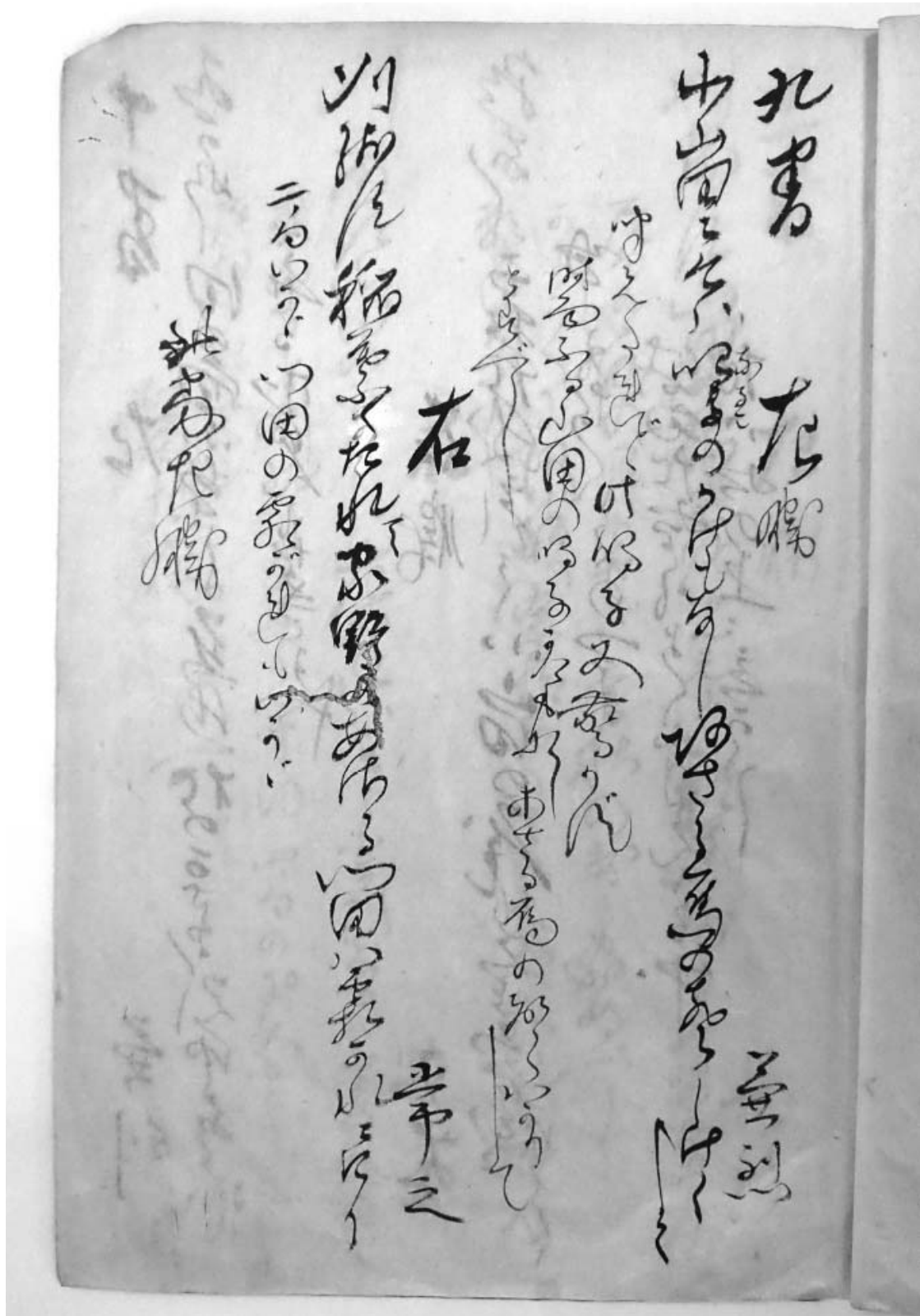


3才

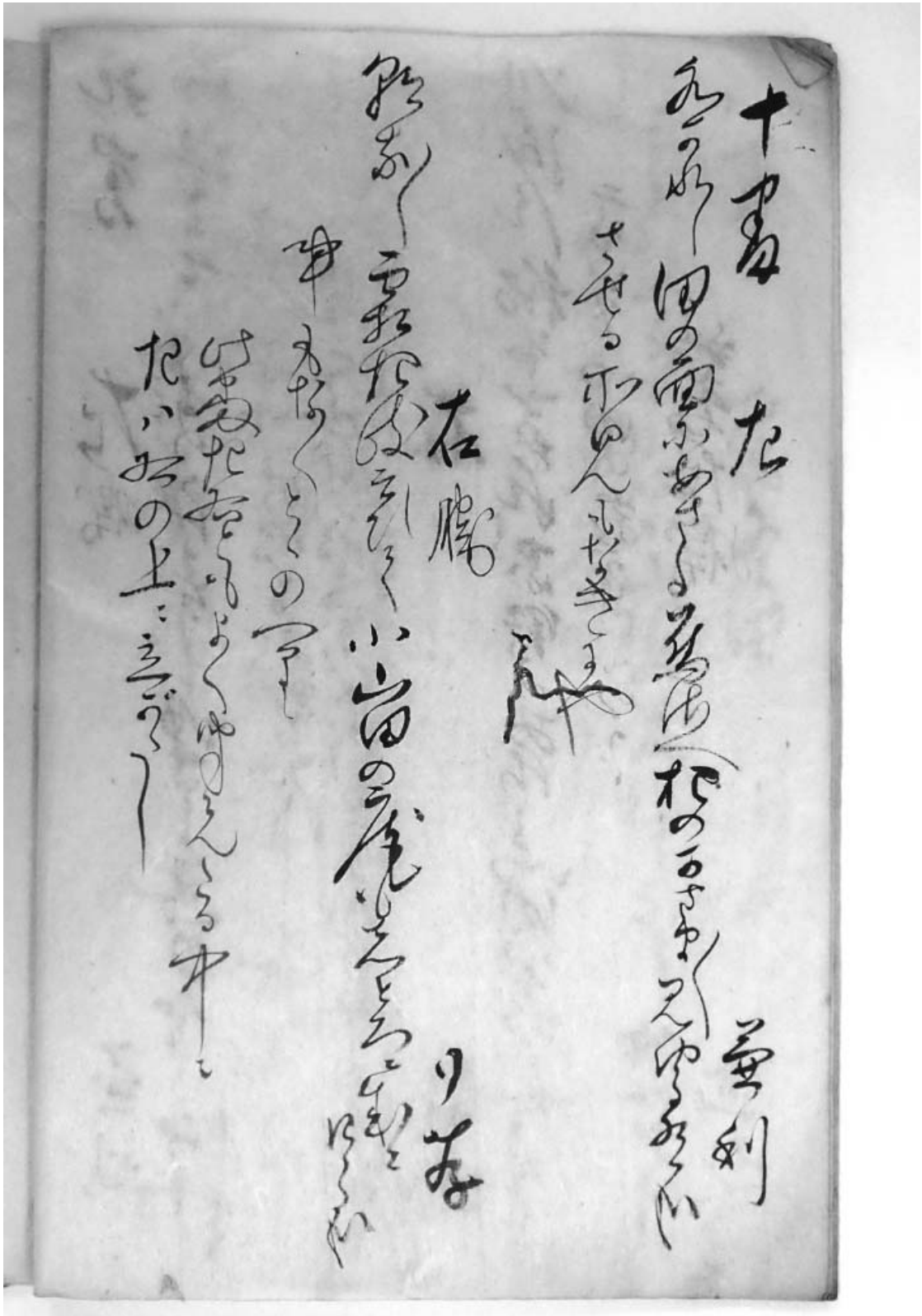




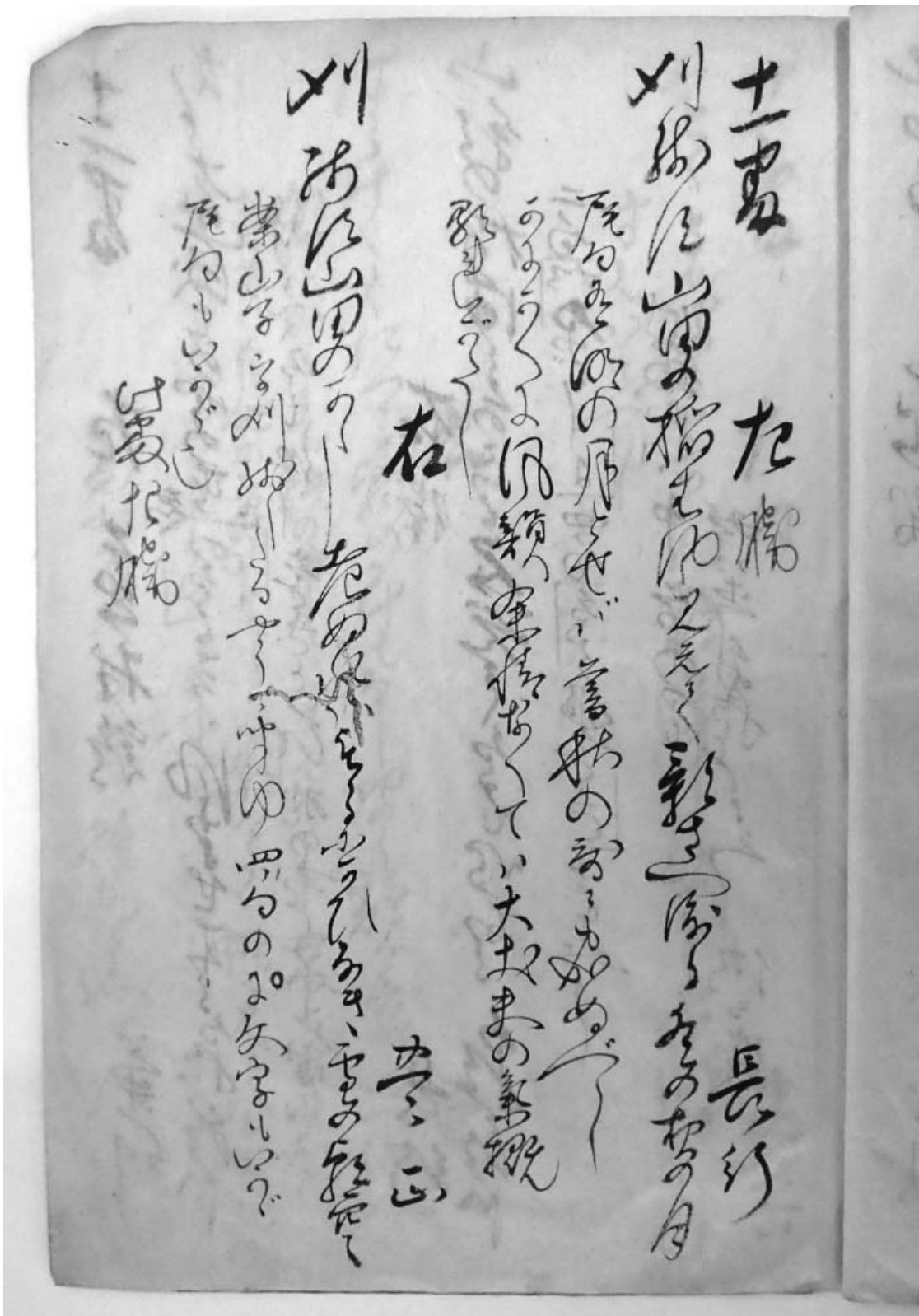
4才



5才

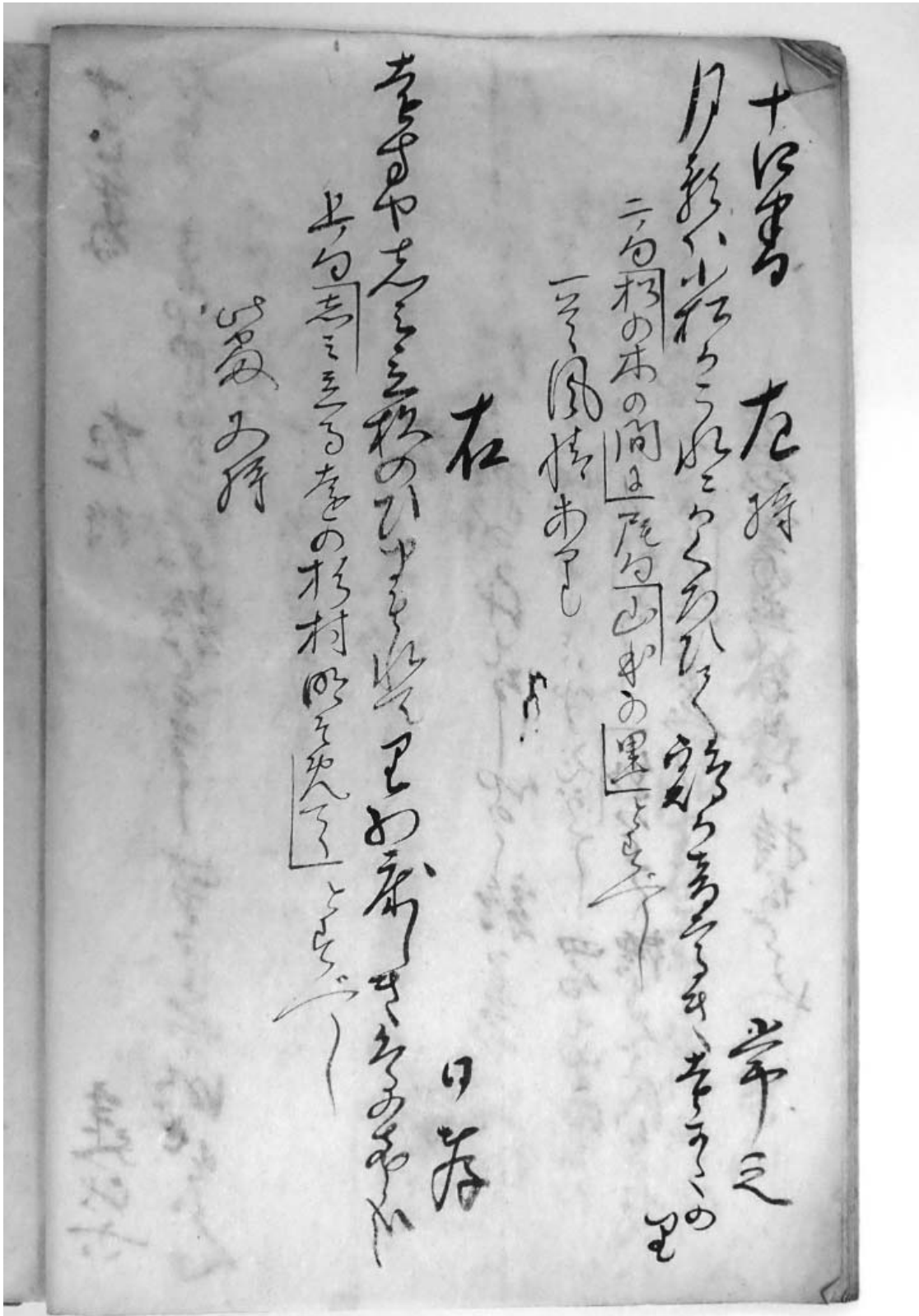


5ウ



6才

十二番 左 色材銘 兼利
 此の漆皮この所の漆意のまじりしゆをせまらぬ
 ゆゑにし他一なきこと此の漆のまじりぬ
 右勝 長約
 山形のはほこのころとえんをむかひぬ
 二番材わがうは四のうらほをきしとせ
 けあたい中かあり
 おりまの指どまう 仍る勝



7ウ

十の五

た

五三

新米貯りたるの一杯のええと
明人と云ふ之は平氣

袖の傍の〇新米と云ふは
右端あり袖の

新米と云ふて四の〇と云ふは
此の他者の

新米

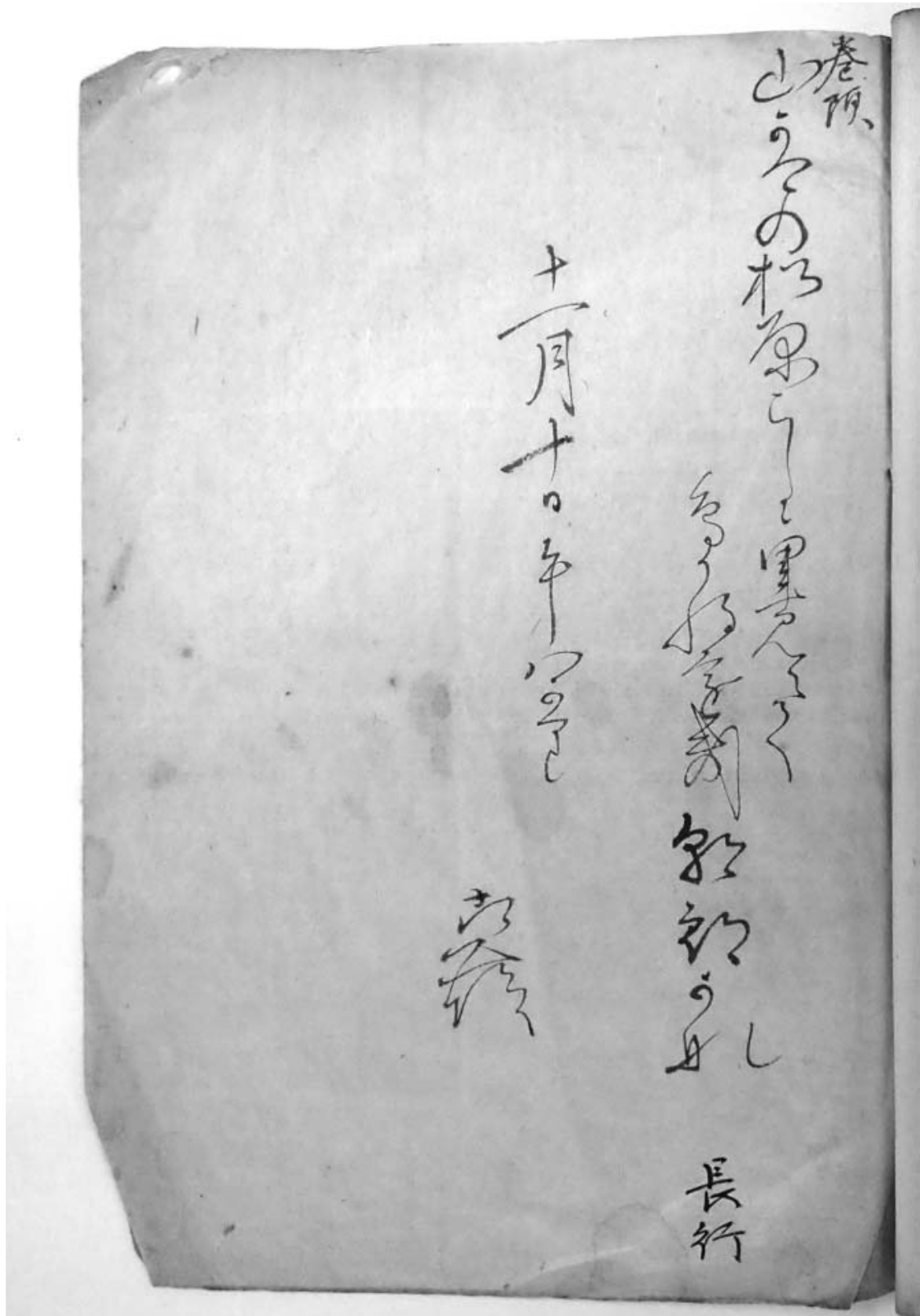
右端

二五好

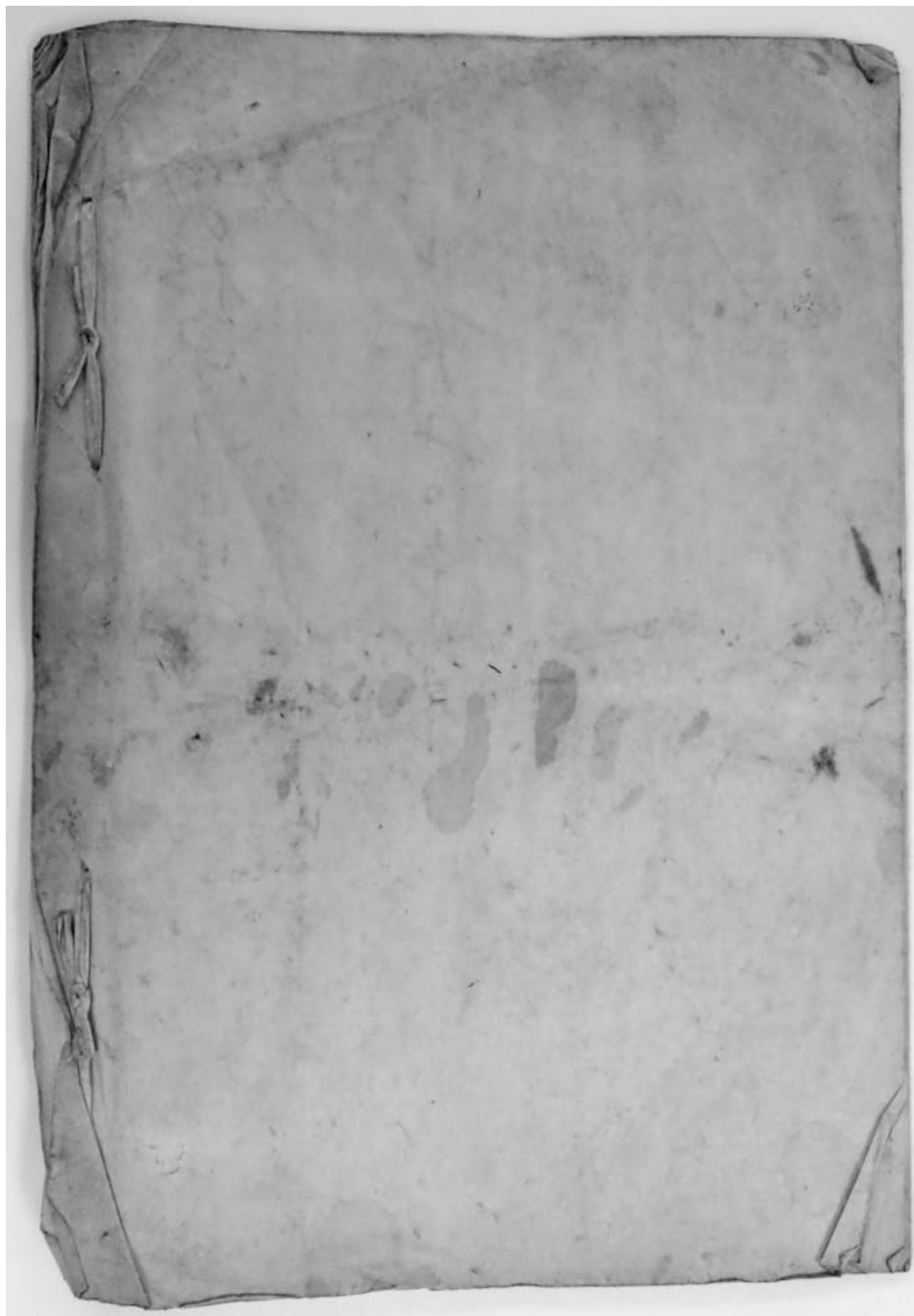
新米と云ふは中々之を
おのれを
その新米

ゆえに

時爰に既に難ありおのれの
端



9才



9ウ

凡例

- 一 本稿は、鹿島家歌合の翻刻である。本作品は、底本では「歌合」とだけ記されているが、内容から推定される開催場所と年次により「嘉永六年十一月十日鹿島家歌合」という名称を用いた（解題参照）。
- 二 底本には、山陰歴史館蔵本（鹿島家旧蔵本）を用いた。
- 三 底本の翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。
 - 1 漢字・仮名の表記は現行の字体によった。
 - 2 原文に元からある以外の濁点は施さなかった。
 - 3 繰り返し記号「ト」「ク」は原文のままとした。
 - 4 「ハ・ニ・ミ・ノ」の片仮名表記は、現行の仮名に改めた。
 - 5 仮名遣いは、歴史的仮名遣いと違うところも原文のままとした。
 - 6 和歌に通し番号を付した。
 - 7 和歌・判詞などの配行や文字の位置はなるべく底本を尊重したが、なお適宜改めた。
 - 8 合字「ㇿ」「と」はそれぞれ「より」「こと」に改めた。
 - 9 見せ消ちは底本と同様、訂正する語句の左側に抹消記号「と」を付し、その右側に訂正後の文字を本文よりやや小さく示した。
 - 10 本稿を成すにあたり、貴重資料の影印・翻刻の掲載をお許しくださった山陰歴史館に対して深謝申し上げます。

一番 左 埋火

日孝

1 冬こもりかたらふこともこん春の思ひおこせる埋火のもと

驚く程のふしも見えねど

聞えたり

右勝

兼烈

2 見る夢は春にかよひて冬の夜の長きもしらぬ埋火のもと

おなじく驚くべきにはあらねど

ととのへり

此番左右とも勝敗分ちがたき歌也されど

右方上の句いさゝか勝れる歟仍而右いさゝか勝

二番

左勝

重固

3 おもはすも夢と成けり埋火を幾度となくかき起す間に

初二の句「おもほえぬ夢もこそ見れ」とすべし

一首風韻無きにあらず

右

豊正

4 更行は閨の埋火かき絶て渡るも寒き夢の浮橋

寒夜のさま聞えたり

此番又勝劣分ちがたしされど右はあからさまに

左は趣ありげ也かくて趣ありげなる方に

耳かたぶきぬ

三番

左

常之

5 空たきの梅香かほる埋火に眠し猫の夢やいかなる

四の句「眠れる猫の」とすべし

但し此下の句しばく耳馴れたり

右勝

重好

6 かひなれし手さへ放れてから猫の夜たゞ眠れる埋火のもと

又眠れる猫よくいかなる夢か結ふらん

此番右方勝れる事けちえむ也

四番

左勝

建比古

7 さえまさる夜半にも有歟埋火のかしらの雪ははらひ尽せと

趣向は聞えたり

但し英雄の歌にあらず

右

常之

8 空たきにしはしは春の心地して夢長閑なる埋火のもと

初二の句「空たきの薫りは春の」とすべし是もしばく

よみ出る事共也

此番右に対ぶれば左方

はるか也

五番

左

兼利

9 かたるへき友ならねとも埋火は寒き心のたのみ成けり

寒き心といふ事いかゞ

聞えたれども調ひがたし

右勝

重好

10 霜さゆる閨のやつれの有明にとはれて寒き埋火のもと

氣勢勇力あり人の顔を見ぬ歌なれば也

此番論なく右勝也殊に一首の気概初番より

五番に至る迄此歌に並ぶべき物なし

六番

左

日孝

11 雪ふれは籬もあれて白菊の俤にほふ埋火のもと

俤匂ふとは菊の名残忘れがたきをいへるにや

いとく／＼迂遠なり

右勝

兼烈

12 松風の音に心をすます哉老の友なる埋火のもと

茶翁の悟道いかばかりに歟判者得はかり得ず

此番白菊の俤松風に

おしけたれたり

七番

左

長行

13

ひとり守る閨の埋火小夜更ておく霜白くなるそ寒けき

さしつぐべき炭だに

無しとや

右勝

重好

14

老ぬれは心も細く成にけり身を埋火の有と斗に

尾句「はひかくれつ」とすべし

此番ひとり寝の閨よりも老らくの心細さ

限りなし仍而左は右に及びがたし

八番 左勝 冬田

建比古

15 鳴子には驚かされぬ小山田の落穂になるゝ村雀哉

初二の句「鳴子縄引人もなき」とすべし

一首優美にて尤よろし

右

重好

16 夕日影つとふ鳴子の縄朽て音せぬ冬は淋しかりけり

夕日影が鳴子縄をつたふといふ事さしも驚かず下の句も

凡様也

此番左勝はさら也

九番

左勝

兼烈

17 小山田に今は鳴子なるこのかけもなしあさる鳥の声しけくして

聞えたれど此鳴子又驚かず

時雨ふる山田の鳴子かけもなしあさる鳥の声はかりして

とすべし

右

常之

18 刈残す稲葉くたれて家鴨のあさる門田は霜かれにけり

二の句いかゞ門田の霜がれもいかゞ

此番左勝

十番

左

兼利

19

水かれし田の面にあさる鳥さへおのかさまく見ゆる冬哉

させる所見もなきにや

右勝

日孝

20

朝なく霜おきそひて小山田の庵もしとろに成にける哉

事もなくととのへり

此番左右ともよく聞えたる中に

左は右の上に立がたし

十一番

左勝

長行

21 刈残す山田の稲は風見えて影さへ渡る冬の夜の月

尾句有明の月とせば暮秋の歌にも成ぬべし

かにかくに風韻余情なくては大丈夫の気概

頭れがたし

右

豊正

22 刈残す山田のかゝし老ぬれはもるにかひなき雪の朝空

案山子を刈残したるやうに聞ゆ四の句のに文字もいかゞ

尾句もいかゞ也

此番左勝

十二番

左

遠村鶏

兼利

23

ほと遠きこの野のすへの鳥か音も風によせ来る朝朗哉

聞えたり但し遠きといひ野の末といふも心ゆかず

右勝

長行

24

山影の梢はるかに里見えて鳥も鳴なる朝朗哉

二の句「松原ごしに」四の句「鳥かね遠き」とすべし

此番左は申旨あり

右は直したれどよろし仍而勝

十三番

左持

建比古

25

遠くとも聞もまかはぬ鶏か音に此里迄や明んとすらん

聞えはすべし

上の句今少し

右

兼烈

26

はるけくてたつる朝けのかけもなし聞く鶏か音やいつこ成らん

朝けとのみにて煙の事には聞えがたし四の句も聞ゆると

なくては自他の差別なし「朝けたく煙も見えす鳥かねの

聞ゆる方やいつこ成らん」とすべし

此番右方直したれば持などにや

十四番

左持

常之

27

月影は小松かうれにかくろひて鶏か音高き遠かたの里

二の句「松の木の間に」尾句「山本の里」とすべし

一首風情あり

右

日孝

28

遠方やしみ立杉のひまもれて里わ床しき鳥の声哉

上の句「しみ立る遠の杉村明そめて」とすべし

此番又持

十五番

左

豊正

29

朝気たつ遠の一村ほの見えて明んと告るくたかけの声

初句例の也「朝けたく」とすべし義論あり初句に

朝けといひて四の句に明んと告るとはいかゞこは作者の

疎漏也

右勝

重好

30

夜こもりにうたふやいつら庭つ鳥声のみもるゝ遠の松原

聞えたり

此番左は既に難あり右はとゝのへり勝

えりうた

31 老ぬれは心もほそく成にけり身を埋火のはひかくれつゝ

重好

32 鳴子縄引人もなき小山田の落穂になるゝ村雀かな

建比古

33 霜さゆる閨のやつれの有明にとはれて寒き埋火のもと

重好

34 おもほえぬ夢もこそ見れ埋火をいく度となくかきおこしす間つゝ

重固

35 飼なれし手さへ放れて唐猫の夜たゝ眠れる埋火の本

重好

36 朝な〜霜置そひて小山田の庵もしとろに成にけるかな

日孝

巻頭

37 山かけの松原こしに里見えて

鳥かね遠き朝朗かな

長行

十一月十日午はかり

古蔭